
右手に剣を左手にジェラートを

28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右手に剣を左手にジェラートを

【Nコード】

N8639V

【作者名】

28号

【あらすじ】

自作小説「右手に剣を左手に恋を」の外伝小説置き場です。

拍手お礼として載せていた物の避難場所なので、今のところ書き下

ろしはありません。（もしかしたらこっさり増えるかもだけど）

ジェラート食べてるだけ…な短編小説ですが、よろしければどうぞ！

また本編も「小説家になろう」にて連載中ですので、あわせてよろしくお願ひします！

Episode 01 恋人はジェラートが好き(前書き)

ヴェンセント×キアラ編

【騎士の初恋編】後のイメージです

Episode 01 恋人はジェラートが大好き

今声をかけたら確実に殺される。

そうわかっていながらも目が離せないところ、自分は本当に目の前の少女が好きなのだろう。

そう冷静に分析したのは、色とりどりのジェラートが並ぶジェラテリーアには似つかわしくくない、この国の王子であり騎士でもあるヴィンセント＝アルジェント29歳独身である。

ジェラテリーア・ディ・ジュリオと呼ばれるそのジェラテリーアが、ガリレオの騎士達行きつけの店であることを知ったのはつい先日のこと。

そのジェラテリーアは、街の中央に立つ宮殿（国王が執務を行う場所）の前に広がるシニョリーア広場の脇道にある。

観光客で賑わう広場の喧噪から一歩離れたその店にいけば、自分の前になかなか現れてくれない思い人に会えるかもしれない。

半ば冗談のつもりでそこに赴けば、運が良いのか悪いのか思い人のキアラ＝サヴィーナはそこにいた。

「で、どうするんだい？」

店の主である初老の男、ジュリオの言葉にジェラートが並ぶガラスケースに張り付いたキアラはうなるような声をあげる。

「いちご…、でもチョコも捨てがたいし、久しぶりにバナナも食べたいし」

「キアラちゃんはホント、ジェラートが好きだね」

「仕事を効率的に行うには、糖分の補給が必要なんです」

「別に隠さなくて良いじゃねえか」

素直になれと笑われ、キアラは不満そうな顔でガラスに鼻を押しつける。

「まあ、嫌いじゃないですけども」

「よし、素直でかわいい女の子にはサービスしちゃうおう！」

とたんに、キアラの顔に花が咲くような笑顔が浮かぶ。

「じゃあ、いちごとチョコ!」

「あれ、いつもはもう一種類いくのにとした?」

「給料日前でお金が…」

でもやっぱり…といいながら、再びガラスケースにキアラは顔をくつつける。

そんなやりとりを扉の影からこっそりのぞいていたヴィンセントは、さてどうした物かと腕を組む。

ここで入っていき、おごってやりたいというのが男心だ。

だが、なにせ相手はあのキアラである。

ジェラート屋で子供のようにガラスケースに張り付いている様子を見られていたと知れば、烈火の如く怒り出すだろう。

「あー、きめられない!」

しかし店の中で、頭を抱えたキアラにヴィンセントは思わず一歩を踏み出していた。

怒られたとしても、さけられたとしても、目の前の少女にジェラートをおごってやりたい衝動が勝ったのだ。

「おじさん、バナナ追加で」

ヴィンセントの言葉に、ぎょっとしたのはキアラ。ぎょっとしたついでに腰の剣まで抜いている。

「なんでここに!」

予想通り、キアラはヴィンセントを激しくにらむ。まるで、威嚇するネコである。

「たまたま通つたら、君が悩んでいるのが見えて」

「い、いつから…」

「始めからだよな」

ヴィンセントに変わって答えたのジュリオ。

「で、お前さんも食ってくかい?」

「じゃあピスタチオと、おすすめのフレーバーを」

「新作があるんだ、なんなら味見してくれよ」

「じゃあそれを、カップで」

「ってちよつと待て!!」

はじめて会うというのにカウンター越しににこやかなトークを展開しているふたりに、待ったをかけたのはキアラ。だがそれ以上、彼女は言葉を続けられなかった。

「忘れてた、ほらこれ、キアラちゃんの」

ジュリオにジェラートを差し出され、キアラはうめきながらそれを差し出す。

その際に、ヴィンセントは二人分の代金を払う。

「まいどあり」

ヴィンセントにジェラートを渡し、ジュリオは笑う。

「お金払いますから!」

「こういうときは男性が払う物だろ」

「こういうときって、あなたが勝手にきただけでしょう!」

「そう怒るなよ、溶けるぞ」

ヴィンセントの言葉に反論できぬまま、キアラは彼とともに店から出る。

「で、君はいま休み時間か?」

「そうです! でもすぐに帰りますから、今すぐに!」

「じゃあ送るよ」

「あなたも帰れって言う意味です!」

つれないなと思いつつ、ヴィンセントはジェラートを口に入れる。

「あ、この新作美味いな」

思わずつぶやいた瞬間、キアラの視線がジェラートに注がれた。

自分に向けられるよりも熱い視線に、ヴィンセントはほんの少しだけジェラートに嫉妬する。だが、そこで終わる彼ではない。

「送っても良いなら、半分あげてもいい」

「ひ、卑怯です!」

これを卑怯と取るくらいだから、キアラのジェラート好きは筋金

入りのようだ。

「で、どうする？早くしないと全部食べるぞ」

ヴィンセントの言葉にきっかり10秒悩んだあと、キアラは上目遣いに彼をにらんだ。

「ピスタチオの方も、少しくれるなら送られます」

あまりに可愛らしい妥協案に微笑みながら、ヴィンセントは彼女のジェラートの上にピスタチオと新作フレーバーをのせてやった。

ヴィンセント×キアラ編 「END」

Episode 2 騎士隊長とジエリート（前書き）

ヒューズ×レナス編

【隊長達の受難編後】のイメージです

Episode 02 騎士隊長とジェラート

ジェラートを食べる若い男が、レナスは好きだった。

というか、甘い物を好む男性が彼女は好きだ。

男らしさの中にある子どもっぽい部分に、正直レナスは弱い。

だが、男は男でもこの男だけは別である。

「決められねえ」

と馴染みのジェラテリアのガラスケースに張り付いているヒューズに、レナスはウンザリした顔を向ける。

「いい年の男がジェラートって……」

「いいじゃねえか、ヒューズのお陰でうちの店が持つてるようなもんだ」

調子の良い店の主ジュリオの言葉に、レナスは更に顔をしかめた。

「イチゴとチョコと、キャラメルで」

ヒューズがようやく決めたオーダーは、甘い物好きのレナスでも組み合わせない激甘の3種。それもカップではなくコーンで。

「太るわよ」

「腹筋のかたさならお前にも負けん」

「負けたら問題よ」

ジェラートを手に振り返る男に軽く蹴りを入れ、レナスは行くわよと声をかける。

「お前は？」

「太るもん」

正直ヒューズには負けるがレナスも甘い物には目がない。

けれど今は駄目だ。

「来週は合コンあるし」

「先週男に振られた女の台詞とは思えないな」

「五月蠅いわねえ。そろそろやばいのよ」

歳が、とは口が裂けても言えない。

「今度こそ、今度こそ決めないと」

「焦って変なのに出すなよ」

「出さないわよ！ 絶対、今度こそ旦那を捕まえるんだから」

それにおちおちしていたら、こっちの男の方が結婚してしまいうだとレナスは密かに思っている。

さっきだって、店にいた若い娘達が彼を見ていたのをレナスは知っている。

レナスはこれっぽっちも興味はない。がしかし、ヒューズがジェラート好きであることを知った娘達が、こっそりジュリオのジェラテリアに通い詰めているという話を、同期の友人から聞いたことがある。

だが当の本人は全く気付いていない。周りの甘いため息にも視線にも。

「今度からは、食べるジェラート決めてから買いに行きなさい」

「あそこで決めるのが良いんだよ」

店の充満するあの甘い香りがたまらないと言いながら、ヒューズはジェラートを嘗めている。

本当にいい年をして、と思うがそう言えば昔からこの男は甘いものばかりを食べていた気がする。

というか、そのきっかけを作ったのは自分だった気もする。

街中を連れ回し、ジェラテリアを梯子するのに無理矢理付き合させたことが一体何回あったか。

「ああ言うことは、恋人としてみたかったのに」

いつの間にか自分よりもジェラート好きになってしまった男に苛立ちを感じながら、レナスは思わずつぶやく。

騎士団に入る前はいつもこの男とばかりいた。

騎士団に入ってからはこの腹筋の所為で彼氏が出来ず、やっぱりこの男とばかりいた。

映画で見るようなジェラートを片手に恋人とデートというシチュエーションを切望しているのに、結局付き合ってくれるのはジェラ

ート好きのこのおっさんだけである。

「もうやだ。若くてピチピチしてステイツの映画スターみたいな人とジェラート食べたい」

「ん？喰うか？」

「前半聞いてなかったでしょう！ あんたじゃなくて、他の男が良いつて言ったの！」

「といいつつ、目の前に差し出された甘い香りにレナスの胃が空腹を訴える。」

「合コンまでに痩せようと、最近では1日1食しか食べていない。それもサラダばかりだ。」

「ここで負ける訳には……」

「なら俺が食う」

と遠ざかるジェラートに、思わず手が出かけた。

中途半端に手を伸ばした状態で動きを止めるレナスに、ヒューズがふつと笑う。

「ほれ、好きなの食え」

「全部好きだから決められない」

「甘すぎる3つのジェラート。でもそれは、全てレナスが好きな味だった。」

「そう言えばあなた、ソルベの方が好きじゃなかった？」

「たまには良いだろう」

手渡されたジェラートを受け取って、レナスはそれにかぶりつく。甘い。でも、しつこいくらいが本当は好きだ。

「全部食うなよ」

「けど、お腹空いた……」

思わず零れた本音に、ヒューズが苦笑する。

「お前午後から休みだろう、たまにはうちで食うか？」

料理付きのこの男がつくるパスタは絶品で、それはレナスの好物でもある。

「ピッツアも焼いてくれるなら、行ってもいい」

「太るんじゃないのか？」

「よくよく考えたら、痩せたら胸も小さくなるなって」

「安心しろ。若干たくましいが、お前の胸は十分立派だ」と言えば、レナスの右フックがヒューズをぶっ飛ばす。

「このジェラート、没収」

「俺の金で買ったんだぞ」

「私が完食するのを隣で指をくわえてみている」

レナスが高笑いを返せば、ヒューズは本気で凹んだ顔をする。

まあ、最後の一口くらいは残しておいてやるう。

意地悪く笑いながら、レナスはジェラートにかぶりついた。

ヒューズ×レナス編 「END」

Episode 3 立派な騎士になるために(前書き)

団長×キアラ(7歳)編

(騎士の初恋編のネタバレ含みます)

Episode 03 立派な騎士になるために

「さあ、好きなものを選んで良いんだぞ？」

お父さんが好きなものを買ってやると、馴染みのジエラテリーアに娘を連れてきたヴィートは高らかに宣言する。

だが今年7歳になるキアラは「いけない」の一点張りである。

仕事が忙しく、こうして二人きりで時間を取れたのは半年ぶり。

さすがにこれは嫌われているようだ、ヴィートは思わずジエラテリーアの壁に縋り付く。

「クリステイーナ。ついに俺は娘にも嫌われてしまったよ、俺には笑顔すら見せてくれないよ」

年甲斐もなく泣き出すヴィートに、彼の娘が向ける眼差しは侮蔑である。

妙に大人びたその視線はヴィートの亡き妻にそっくりで、店主のジュリオはおかしそうに見ていた。

「じゃあ、俺がオススメをもってやろうかな」

自分の世界から戻ってこないヴィートの変わりに微笑めば、キアラは慌てて首を横に振る。

それから子供用の台に乗り、彼女は声をすぼめた。

「私、もうジエラートは食べないって決めてるの」

「どうしてだい？」

「騎士は、子どもみたいにジエラートなんて食べないでしょう？」

「お嬢ちゃんも騎士になりたいのかい？」

「うん。だから、ジエラートは我慢するって決めたの」

子どもらしい考えに思わず吹き出したのはジュリオ。

「安心しな、この店は騎士御用達のお店だ」

「本当？」

「何だって、騎士団長が毎日来てるからな」

ジュリオの言葉に驚き、それから今更のようにキアラはガラスの

ケースに目を向ける。

「我慢しなくても、騎士になれる？」

「もちろん」

「じゃあ、お父さんが食べてるのと同じの、食べたい」

同じのを食べて、自分もお父さんみたいな立派な騎士になると告げるキアラにジュリオは思わず顔をほころばせた。

もし聞こえていれば本人は感動のあまり気絶したに違いないが、運悪くヴィートはめめめそしたまま人の店の壁をカリカリひっつかいている。

「こりゃあ、娘の方も立派な騎士になりそうだ」

苦笑しながらジェラートを差し出せば、ヴィートが切望した花のような笑顔がそこにはあった。

団長×キアラ（7歳）編 「END」

Episode 4 右手に剣を左手に短冊を(前書き)

ジェラートとは関係なしの季節限定の小話(七タver)
ヒューズ×レナス編

Episode 4 右手に剣を左手に短冊を

とある島国では、7月7日に願い事をする叶うという言い伝えがあるらしい。

そんな話が囁かれるようになった7月のある日。ガリレオ騎士団第4小隊の隊室では、「願い」に敏感な隊長が、早速噂の出所を探り出し、言い伝えの詳細を聞き出していた。

「だから、織姫と彦星って言う恋人同士がだな……」

「人様の恋路などに興味はない！ その願いを叶えるという部分だけ教える！」

噂の出所ことヒューズを椅子に縛り付け、その胸ぐらを掴んでいるのはレナスである。

「何でそんなにムキになる」

「叶えたい願いがあるからだ！」

「男か」

「他に何がある！」

何も無いのかよ、とツツコミたいのをぐっところえて、ヒューズは渋々話を進めた。

「短冊って言う紙に願い事を書いて、笹って言う木につるすんだ」

「たんざく？ ささ？」

「どっちもフロレンティアにはないし、とりあえず紙に願い事を書いて、そこら辺にある木にでも吊せばいい」

「願いを書いた紙を吊す、か」

いつの間にか器用に縄をほどいたヒューズが、レナスの机の上に置かれたメモ帳を手取る。

「これを縦に細長く切る」

「うんうん」

「で、上の部分に穴を開けて紐を通す」

「穴？」

「後で開けてやるから、とりあえずここに願い事を書け」

そう言って説明するヒューズと、彼の側で食い入るように説明を聞いているレナス。

パーソナルスペースを完全に割ったその距離に、周りで見ていた騎士達がこっそり囁き会った。

「今更星に何て願わなくてももって思うのは私だけかしら」

「それを言ったら隊長怒りますよ」

騒ぐ騎士達にレナスの副官がそう突っ込んだが、短冊に夢中の隊長が、周りの視線に気付く様子はない。

「できた！」

そう言ってレナスが掲げた短冊に書かれていたの一言、『結婚』である。

「デカイ字だな」

「星に届くようにと思って」

得意げにいうと、レナスは残った方の紙をヒューズに手渡す。

「ほら、あんたも何か書きなさいよ」

「別に願うことなんてない」

「じゃあ私のために願いなさい」

ヒューズに無理矢理ペンを持たせ、レナスはその腕を掴む。

『レナスが結婚出来ますように』

無理矢理書かされたその字はヨレヨレだが、レナスは満足そうに腕を放す。

「お前、本当にひどい女だな」

「願いがいいなんて寂しいじゃない。だからあたしのお願い貸してあげたのよ」

どこまでも自分勝手なレナスには、もはや苦笑するほかない。

「さあ、木に吊しにいきましょう」

最後まで強引なレナスは、ヒューズを引きずって部屋を出て行く。それを見送った騎士達は、隊長に続けとばかりに自作の短冊を作り出す。

「仕事中なんですけど」
「キアラのつぶやきを聞く者は、勿論誰もいなかった。」

右手に剣を左手に短冊を【END】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8639v/>

右手に剣を左手にジェラートを

2011年9月28日16時46分発行